

2019 年度看護学部一般入学試験問題

国 語

注 意 事 項

- 1 国語の問題冊子は18ページあり、問題は2問(解答番号は 1 ~ 23)である。問題冊子の白紙・空白の部分は下書きに使用してよい。

- 2 別に解答用紙が1枚ある。受験番号欄に受験番号5桁を記入し、マーク欄の該当するところをマークしなさい。

氏名を記入してはならない。なお、記入した受験番号やマークが誤っている場合および無記入の場合は、国語の試験が無効となる。

(例) 受験番号を記入し、さらにその下のマーク欄にマークして下さい。

受験番号				
0	0	6	0	3
●	●	○	●	○
①	①	①	①	①
②	②	②	②	②
③	③	③	③	●
④	④	④	④	④
⑤	⑤	⑤	⑤	⑤
⑥	⑥	●	⑥	⑥
⑦	⑦	⑦	⑦	⑦
⑧	⑧	⑧	⑧	⑧
⑨	⑨	⑨	⑨	⑨

- 3 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。マークはHB・Bの鉛筆(シャープペンシル可)で濃くマークしなさい。解答用紙を折ったり曲げたりしてはならない。

例えば 2 と表示のある問に対してcと解答する場合は、次の(例)のようにマークシートの2の解答欄のcにマークしなさい。

指定欄以外へマークした場合は解答が読み取れなくなる場合があるため、記入しないこと。訂正は、消しゴムできれいに消すこと。

(例)

解答 番号	解答欄				
	a	b	c	d	e
1	○	●	○	○	○
2	○	○	●	○	○

(マークの仕方)

良い例	悪い例
●	○ ⊗ ○ ●

注意事項の続きは本冊子の裏にあります

I 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

ロバート・F・マフィーはアマゾンでフィールドにした文化人類学者だが、彼は脊髄癌せきすいがんにおかされたじぶんの経験を記録している。病気になるとはどういうことか、他者の態度はどう変わるか、所属する集団のあつかいは、そして死と闘い、それを受け入れることは……。彼は病Aによってからだに障害をもつことは「からだのあり方であると同時に、社会的アイデンティティのあり方」でもあるという。みずからの経験や実感にもとづく分析であるだけに、とても説得力がある。

病によつて障害をもつた者の心にはなにが生まれるか。マフィーは「第一に、自尊心が損なわれ、自己の評価が低下すること。第二に、障害が思考のなかへと侵入して思考のゼンブクアを占領しようとする。第三に、激しい怒りがテイリュウイとなつて存在すること。第四に、欲せアざる新しいアイデンティティの獲得」だとしている(R.F. Murphy, *The Body Silent*, 1987) 『ボディ・サイレント』辻信一訳、新宿書房、一九九二年、一四三頁)。

病はからだへの侵入者として、のつとり魔として自覚される。I そののつとられたからだのなかで、じぶんは閉じこめられて身動きがとれない。おまけに周囲からは、わたしは病におそれれ障害を負わされた新しい人格と見なされる。これまでのようにはたけなくなつた人、たよることができなくなつた人、介護しなければならぬ人、哀れな人、やっかいな人……。この意味では、病人は社会によつて定義づけられ、意味づけられるひとつの社会的アイデンティティである。

周囲の人びとは文字通り腫れものにさわるように病人に接する。その時しめす「顔の作業」や「感情作業」は病気の存在を否定することだ。何事もなかつたかのように、なにも変わっていないかのように明るく、いつも通りにふるまおうとする。マフィーはその理由を、病人のしめす反応が予測の範囲をこえていて解釈にひずみを生じさせてしまうからだという。からだの変容はじぶん自身はもちろん、周囲の人びとに対する見方や考え方におよぶ。変容した病人の人格に周囲の者はうまく対応できないというわけだ。しかも、そのわざとらしいとりつくりが病人をさらにいらだたせ、傷つけることになる。

もちろん、病の経験は短期間のもので完全に治癒する場合の方が多い。しごとにも復帰できるし、家族や知人との関係も元通

りに維持できるから、人格にも社会的アイデンティティにも、そして人間関係にも大きな変化はもたらされないかもしれない。けれども、わたしたちが健康で長生きをすることを前提にし、病気や死を否定してきたこと、社会もまた同様の前提をもとにして機能していることに気づきつけかけにはなるはずだ。からだをこわしてまではたらくことの無意味さやほたらかされることの理不尽さに気がついて、過労死や燃えつきシヨウゴウ群^(ウ)におちいることを避けることができれば、病の経験は貴重なものだということになるのかもしれない。

^{*1} G・オーウェルは見ることに、聞くことはもちろん、嗅覚や触覚から得る実感をたよりに文章を書いた作家だが、彼がパリでの放浪生活の経験をもとにして書いた「貧しき者の最期」には、ハイエン^(エ)を患って入院したときの経験が語られている。そこでオーウェルが関心をむけるのは、病院という世界、病気に対する医者^(C)の姿勢、そして医者と患者の関係の奇妙さである。

私自身も、気管支音のまれにみる好例だというので、時には十二人もの学生が私の胸の音を聞くために行列した。それはいかにも奇妙な感じだった——奇妙だというのは、彼らは自分たちの職業を学ぶことに強度の関心をもちながら、同時に、患者が人間であるという意識を全くもっていないように見えたからである。語るのも不思議なくらいだが、若い学生が自分の処置する番になって進み出る時など、まるで子供が何か高価な機械をとうとう手にした時のように、文字通り興奮に震えているのだ。 (G.Orwell, *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, Vol. IV, 1968 || 小野協一訳「貧しき者の最期」『オーウェル著作集Ⅳ』平凡社、一九七一年、二〇七頁)

病院は病気を治してくれるところであり、そこには治癒させてくれる医者^(C)がいて看護師がいる。彼や彼女たちが患者のからだに病気に注意をむけるのはあたりまえのことだ、病院では日常的に見ることが出来る光景だろう。けれども患者の側にたてば、そこに奇妙な感覚をもたざるをえないのもたしかなことだ。

オーウェルはじぶんが単に病気をもらったからだとあつかわれた経験から、医者、病院、そして医学の本質を指摘したが、

彼の作品には逆の立場からの作品もある。「絞首刑」は、イギリスが植民地としてトウチしていたビルマ(ミャンマー)で警察官をしていたときの経験で、死刑の執行にたちあつたオーウェルは、処刑台にむかう囚人が水たまりを避けようとしたことに強い衝撃をうける。それは死刑囚をすでに死んだ人間として見なしていたじぶんの発見であり、無表情に死を受けられているかのように見えた死刑囚が見せた、生きていることをしめす本能的な行動であつたからだ(G.Orwell, *The Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, Vol. I, 1968 塩沢由典訳「絞首刑」『オーウェル著作集Ⅰ』平凡社、一九七一年)。

職務に従事する人間がすべきことはそのしごとに忠実であることだが、それで十分というわけではない。患者を病人として、死刑囚をすでに死んだ人として見てしまうこと。ここには否応なしに、自己を「役割」と一体化させ、また他者も「役割」だけのものとしてとらえてしまうはたらきがある。

*₂ アーサー・W・フランクの『からだの知恵に聴く』は、やはり、みずからの病氣(心臓発作と癌)の経験を素材にしているが、ここで問われているのは、痛みや苦しみ、あるいは不安や焦りといった感情として経験される病についてであり、それとはずれる医療や医学、医者や看護師との関係である。彼は「身体への治療は人に対してなされるべきことのごく一部にすぎない。私のからだがダウンしたときに起きたことは、からだだけではなく、私の生にも起きていたのだ」として、じぶんの体験する病氣と、医者が対処するそれを「病(illness)」と「疾患(disease)」に区別してゆく(A.W.Frank, *At the Will of the Body: Reflections on Illness*, 1991 』からだの知恵に聴く』井上哲彰訳、日本教文社、一九九六年)。

医学は病氣をからだの変調や不全としてとらえる。だから医者がたちむかうのは病氣、

II

 からだの疾患であつて、その症状をしめす患者のものではない。しかも、患者にとって特別の経験も、医者や看護師にとっては日常的なしごとの一例ではない。その感覚の落差が医療行為のなかではほとんど無視されてきた。もちろん、医者も看護師も毎日数十、数百人の患者に対面するから、その一人ひとりの心のなかまで思いはかっていたのでは、しごとになりはしない。町医者とはたがいによく知っている関係をつくることができるかもしれないが、病氣の正確な診断は、大きな病院に行かなければつきりしないことが多い。病氣と医療行為のあいだには、そんな根本的な断絶がある。フランクは、みずからの経験からその問題を鋭く批判する

が、それはじぶん自身にもむけられる問いかけでもある。

病気になれば、医者や看護師、家族や友人にたよらざるをえない。そして彼や彼女らは病人が穏やかで陽気であることを期待する。だから病人はその期待にこたえようと努力して明るくふるまおうとする。フランクは、「人の中で生きることが『取引』をすることだ」という。しかしそれは強制された「顔の作業」や「感情作業」にならざるをえない。病気になったときに彼が感じたのは、じぶんが経験したことのないほどの防御的な態度や警戒心であり、人の支えを必要としながら同時に傷つきやすくなっている心の自覚だったのであり、それを伝えることができない、理解してもらおうことがむずかしいことからおちいる孤独感だったからである。

（渡辺潤「ライフスタイルとアイデンティティ」による）

（注）^{*1} G・オーウェル——イギリスの作家、ジャーナリスト（一九〇三〜一九五〇）。

^{*2} アーサー・W・フランク——アメリカ生まれの社会学者（一九四六〜）。

問1 傍線部(ア)～(オ)に該当する漢字を含むものを、次の各群のa～eの中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

1
5

(ア) ゼンブク

1

- a フクジ的な効果を期待する
- b 道路のカクフク工事を行う
- c 食べ過ぎてマンブクになる
- d キフクの激しい山道に行く
- e 沖で貨物船がテンブクする

(イ) テイリユウ

2

- a 法律にテイシヨクする
- b テツテイ的に調査する
- c 平和条約をテイケツする
- d 論理の矛盾がロテイする
- e 争いをチヨウテイする

(ウ) ショウコウ

3

- a 来季の契約コウカイに臨む
- b 長時間に渡りコウソクされる
- c 手紙にジコウの挨拶を添える
- d 大学で生物学をセンコウする
- e 福利コウセイが充実した会社

(エ) ハイエン

4

a エンテン下で作業する

b 火事がエンシヨウする

c 濃いエンピツで書く

d エンギのよい出来事

e 予行エンシユウを行う

(オ) トウチ

5

a 俳句誌にトウコウする

b 超トウハの議員集団

c トウロン会を開催する

d 気温のトウケイをとる

e 石油価格がトウキする

問2

空欄

I 6

I

・ II

7

II

に入る言葉として最も適当なものを、次のa～eの中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

a ただし

b あえて

c つまり

d むしろ

e しかも

問3 傍線部X・Yの意味として最も適当なものを、次の各群のa～eの中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

X

8

・Y

9

X 理不尽さ

a 精神的に我慢ならないもの

8

b 結果的に徒労であること

c 説明のしようがないもの

d 永遠に終わりがいないこと

e 人の道に外れていること

Y 否応なしに

9

a 人ならば誰しもが

b 意向とは関係なく

c 確信は持てなくとも

d 時代や地域を問わず

e 差別感情を抜きにして

問 4

傍線部 A「病によってからだに障害をもつことは『からだのあり方であると同時に、社会的アイデンティティのあり方』でもある」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の a ～ e の中から一つ選びなさい。

10

- a 障害を負った人の心にはからだがかれまで通りでなくなったことに対する激しい怒りが生まれ、そのことで人格も変調してしまうために周囲の人びとをも困惑させてしまうということ。
- b 障害を負うことはからだがかれまでのように動かなくなることであり、同時に、自尊心や自己肯定感を損なうものである。人の精神面にも影響を及ぼすものであるということ。
- c 障害を負うことはからだの変容でもあるが、そのために周囲の人びとのかかわり方が以前と変わってしまうことを理由に人からの扱いや評価を変えてしまうものでもあるということ。
- d 障害を負うことがからだの変容であることは言うまでもないが、その人物の評価を変えてしまう正当な理由には当たらないということ。
- e 障害を負うことではたらない人や介護しなければならない人というレッテルを社会から貼られることで、人が自身自身の存在意義や価値に自信が持たなくなってしまうということ。

問5 傍線部BとEの「顔の作業」や「感情作業」を説明したものととして最も適当なものを、次のa～eの中からそれぞれ一つずつ選びなさい。 B 11 ・ E 12

- a 周囲の人々が、病人を恐る恐る扱っていることを隠すために行う作業。
- b 周囲の人々が、病人の病に対する恐怖から気を紛らわせようとする作業。
- c 病人の変容した人格が、周囲の人々を安心させるために意図せず行う作業。
- d 病人が、周囲の人々の援助や理解を求めて本心を隠しながら行う作業。
- e 病人と周囲の人々が、病気を理由にした軋轢あつれきを避けようとして行う作業。

問6 傍線部C「医者と患者の関係の奇妙さ」とあるが、この奇妙な関係が生じる理由の説明として最も適当なものを、次のa～eの中から一つ選びなさい。 13

- a 患者が自分の命が左右される状況に置かれているのに、医者は疾患を目にすると冷静であるどころか興奮に震えてしまふものだから。
- b 患者は自分のことを病気を患った人間として扱ってほしいのに、医者は日常業務の一環として主に疾患そのものに着目しているから。
- c 医者は自分の「役割」に忠実に個々の患者に対応しているのに、患者は医者の「役割」は病気を完全に治すことだと思っているから。
- d 医者の「役割」遂行には高度な知識が必要なので、患者が「逆の立場」に立つて考えるということが世間一般の人間関係ほどには容易でないから。
- e 患者にとって自分の疾患に対応可能な医者は限られているのに、医者にとってその患者は毎日対面している多くの患者の一人にすぎないから。

問7 傍線部D「それはじぶん自身にもむけられる問いかけ」とあるが、その内容の説明として最も適当なものを、次のa～eの中から一つ選びなさい。

14

- a 自らが「病」と「疾患」を区別したことが、そもそも病気と医療行為の断絶を生んでいるのではないかという問い。
- b 医療従事者に対して要求するものが大きい一方で、自らは健康に対する意識が低かったのではないかという問い。
- c 医療従事者による正確な診断を阻んでいるのは、病人の側からの意思伝達にも問題があるのではないかという問い。
- d 病気と医療行為のあいだにある根本的な断絶は、病気になってしまった自分が生んだものではないかという問い。
- e 医療従事者や周囲の人間との関係性において、病人の側にも乗り越えるべき課題が存在するのではないかという問い。

問8 本文の内容に合致するものを、次のa～eの中から一つ選びなさい。

15

- a 病人の周囲にいる家族や知人は、病人のアイデンティティ回復や病人との人間関係を維持するために、彼らが病気でないかのよう振る舞う。
- b 病が完全に治癒するという経験をするのは、社会が健康や長生きを前提とし、病気や死を否定して機能していることを知るきっかけになる。
- c オールウェルが囚人の姿に衝撃を受けたのは、かつて自らが受けた奇妙な扱いを、自らも他者に対してなしていたことに気づいたからである。
- d フランクは自らの経験から、町医者のような規模でかつ病気の正確な診断を行える医療機関こそが、病気と医療機関の断絶を解消できると主張する。
- e 病人は健康なときのようにからだは働かないために、自分が支援の必要な傷つきやすい人間であることをうまく伝えられず、一層の孤独を感じてしまう。

II 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

われわれはひとの言葉を顔面どおりに受け止めはしない。だれがだれに向かつてどのように話した言葉であるのかをいつも計測しながら聞いたり読んだりしている。抽象化された言葉をふたたび自分のなかに身体化するとき、話し手の身体性に同調したり、同調する努力をしたりしながら言葉の意味を捉えようとする。話し手、聞き手の共通コードにしたがっていちおうの理解を示しつつも、さらに話し手のコードを^{そんたく}付度して意味をより具体的に明確にすることを心がけているのだ。^{*1}

口頭によるコミュニケーションの場合、言葉は話し手の表情や身振りという身体的な^{*2}コンテキストや場所という空間的なコンテキスト、そして一回限りの時間的なコンテキストとともにたらされるから、聞き手はその言葉がどの程度の確信に基づいて言われたものか、あるいはどの程度の真率さに裏付けられて言われたものかについて、その場その場で判断しながらメッセージを点検している。判断に迷う言い方に対しては「すぐさま「真意」を確かめることが可能だ。「ほんとにそう思っているの?」、「どういう意味でかれのことを偽者って言うの、あたしにはそうは思えないけど」というように、話し手の個別のコードを読みきることは不可能に近い。親しい者どうしの会話でもしばしば行き違いが生じるように、話し手の個別のコードを読みきることは不可能に近い。

あ コミュニケーションを成立させていくしかないのだ。

話すこと聞くことにもそれだけの困難がともなうのだから、書きものによる書き手と読み手とのあいだのコミュニケーションは、いつそうむつかしくなる。そのために書き言葉では書き言葉特有のさまざまなルール(コード)が確立された。たとえば手紙の書き方も人類が永年にわたって築き上げてきたそのルールのひとつだ。メールのやりとりがしばしば感情的な行き違いを引き起こすのは、メールも書き言葉のコミュニケーションであるはずなのに、会話やメモのような気軽で略式の表現を用いるからである。書き言葉がコミュニケーションの意を尽くすためには、ある手順にしたがったそれなりの言葉を費やさなければならぬ。メールには手紙とはまた異なるルールが必要とされているのだが、^Aまだ模索段階にあるので時々齟齬^{そご}を来すのである。

マスメディアという制度は、不特定のオーディエンスを媒介しつつ動員し組織するシステムないしはメカニズムであった。そしてわれわれが生活圏を越えた世界とコミュニケーションしようとするかぎり、マスメディアを媒介せずには不可能であった。もつと事態に即して言えば、もはや生活圏そのものがメディアのネットワークの一環として機能せざるを得ない状況にあるということだ。

不特定のオーディエンスを対象とするマスメディアの場合、メディアとオーディエンスとのあいだの齟齬を軽減しコミュニケーションを円滑にするための戦術と教育体系があらかじめ備えられている。またメディアのコードは、それぞれ異なるコードを生きている「他者」^Xどうしであるはずのオーディエンスのあいだの溝をやすやすと越えさせる。越えさせられなければマスメディアは存立できないのだから当然のことだが、この当然がどのようにして当然になったのかはなおざりにできない問題だ。

メディアの側からオーディエンスの側に向かう情報の流れのなかで、コードも同時にオーディエンスに自然に浸透している。メディアを享受する^Zためにはメディアが設定したリテラシー(コード理解能力)の習得が不可欠だ。オーディエンスはメディアの文法を学ぶことではじめて情報を「正しく」受け入れることが可能になる。メディアの側も受け入れられるために分かりやすいコード設定を心がける。

個々の報道や批評の言説(あるいは映像)はこのメディアのコードにしたがって、メディアのつくりだしたコンテキストに準拠して発信されている。メディアの参照コードとコンテキストとに照らし合わせることで、^①メディアに流通するメッセージの意味がはじめてあきらかになる。言い換えれば、メディアの情報が理解できるということは意識的にであれ無意識的にであれメディアの言語を習得済みであるということだ。^②

批判能力としての「メディア・リテラシー」(メディアを批判しかつみずからメディアを創造する能力)を獲得する以前に、すでにわれわれは第一段階のメディア・リテラシー(既存のメディアを読み取る能力、以下このリテラシーを「原メディア・リテラシー」と呼ぶ)を習得していなければならなかった。この第一段階のリテラシーはマスメディアによって教育され、植えつけられた能力であった。^③

いまわれわれはドラマや報道の進行を突然中断して挟み込まれるコマーシャル映像になんの疑念も抱いていない。しかしそれは民放の番組を見るためのリテラシーに習熟しているからで、北朝鮮の民衆が見ればなんのことかと混乱するだろう。資本主義企業の横暴と映るかもしれない。これはきわめて分かりやすい例だが、このようなコード(約束)がさまざまなかたちでわれわれのメディアの見方・読み方を規定しているのである。

この植えつけられたコードを相対化する機会^④は、異なるコードによってつくられたメディアの作品から衝撃を受けたときか、コード内部の矛盾に気づいたときか、このコードでは解けない「現実」にわれわれ自身が身をさらされたときに限られるであろう。

『朝日新聞』も『読売新聞』も紙面の技術的な構成(段組、記事の配列、見出しの位置、広告スペースなど)やテーマの配列(一面から最終面までの記事内容の順序など)等々はほとんどおなじだが(それでも購読新聞を変えたときにはだれでもすこしとまどうものだ)、憲法改正問題ともなれば大きく立場を異にする。だから技術的なコードを相対化するにはスポーツ新聞や外国の新聞を対比させる必要があるが、論争的なテーマの場合にはおなじ全国紙のなかでもそれぞれのコードを相対化して眺めることができる。全国紙の論調がほとんど横並びのテーマであっても、異なるメディア・ジャンル(とくにインターネットなど)を覗いてみるとまったく違う「事実」や「論評」に触れることが可能だ。

もちろんさまざまなメディアのなかを探し歩くだけでなく、既存メディアのコードの裂け目あるいはメディアが前提になっているコンテキストを突き破って、もうひとつ向こう側の社会的なコンテキストに脱出する必要性に迫られることがある。

しかしこの社会的なコンテキストも客観的な実体としてメディアの虚構のコンテキストの外側に実在しているわけではない。メディアのコンテキストがフィクションであつたように、この社会的なコンテキストもまたひとつの集団的・実践的な観点から想い描かれた「現実」であつて、い。メディアのコンテキストが偽物でこちらのコンテキストが本物だという保証はどこにもない。

メディアのコンテキストもメディアの観点から発見されたひとつの社会的コンテキストに基づいて構築されているのであるか

ら、オーディエンスも自分の直面している「現実」をメディアがどれだけの確に説明してくれるか、つぎの実践にどのくらい資するところがあるかという観点から判断すればよいのである。

ただしメディアはそれぞれの「現実」の当事者ではなく（もちろんメディアそれ自体の当事者ではあるが）、つねに事態を外側から眺める観察者であった。当事者ないしは当事者の視点はメディアのまなざしに挑戦しそれを改変する可能性を秘めているが、一方でメディアはこの当事者の視点を先取りする能力に長けて^たいる。だから社会的実践の当事者はメディアのまなざしに対抗するだけでなく、みずからの実践を踏まえた視点をメディアに学習させることも大事な活動の一環となる。

（井崎正敏『倫理としてのメディア』による）

（注）^{*1} 付度——考えあわせ配慮すること。

^{*2} コンテキスト——文脈。

問1 傍線部X、Y、Zの意味として最も適当なものを、次のa～eの中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

X

・ Y

・ Z

X 即して言えば

- a 注意を払って言えば
- b 期待を込めて言えば
- c 深刻になって言えば
- d 気をつかわずに言えば
- e ぴったり合わせて言えば

Y なおざりにできない

- a 簡単には明らかにできない
- b 深く立ち入った考察はできない
- c 一度で終わらせるわけにはいかない
- d いい加減に済ますわけにはいかない
- e あまり気にするわけにはいかない

Z 享受する

- a 正しく理解する
- b 自分のものとする
- c よいと認める
- d 世間の役に立てる
- e 一般に広く伝える

問2

本文中の空欄

あ

い

に入る言葉として最も適当なものを、次のa～eの中からそれぞれ一つずつ選びな

さい。あ

19

・い

20

あ

a 個別コードにしたがうことは放棄し、お互いに共通コードに歩み寄ることで

19

b 言葉がコンテキストに依存する以上、真意を伝えあうことは不可能だと心得て

c 共通コードを前提にしたうえで、お互いの個別のコードを探りあいながら

d お互いに理解できたという確信に対してさえも、常に疑う心を忘れずに

e 何を話すかよりも、お互いが相手のいうことを傾聴する態度を大事にして

い

20

a 上意下達が常である

b 唯一絶対のものではない

c 公序良俗に反するものもある

d 砂上の楼閣とまではないえない

e 個個別別の判断を要する

問3

傍線部A「まだ模索段階にあるので時々齟齬を来すのである」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のa～eの中から一つ選びなさい。

21

- a メールの際に適用されるべき基準が社会全体で共有されるほど定着していないため、やり取りをする者同士で行き違いやもめごとが起きることがあるということ。
- b メールの基準は気軽で略式のものでよいという合意が十分には得られていないのに、その基準に従ってメールを書く人がいるために社会が混乱しているということ。
- c 話し言葉としての基準が適用されるべきメールの表現に書き言葉のルールを適用させようとするため、コミュニケーションの行き違いが生じるということ。
- d 書き言葉と話し言葉のどちらの基準を適用すべきなのかについて合意が形成されていないため、メールを読む人は内容について勘違いをしがちであるということ。
- e メールと手紙の双方に共通して適用されるべき基準がいまだ確立されていないため、やり取りする人々の間で感情的な行き違いが生じがちであるということ。

問4 筆者の主張を踏まえると、本文中の二重傍線部①～⑤の中に一つだけ種類の異なるものがある。適当なものを、次のa～eの中から一つ選びなさい。

22

- a ① メディアに流通するメッセージ
- b ② メディアの言語
- c ③ 原メディア・リテラシー
- d ④ 植えつけられたコード
- e ⑤ メディアが前提にしているコンテキスト

問5 本文の内容に合致しないものを、次のa～eの中から一つ選びなさい。

23

- a 話し言葉で意思を伝えあうとき、いつどこで話し合いがなされるかによって、真意がどの程度伝わるかが左右される。
- b われわれの生活圏は、もはやメディアのネットワークの一部としての役割を担っているという状況に置かれている。
- c 既存のメディアを読み取る能力を自ら学び熟知している者が、メディアを批判し創造する能力を持つことができる。
- d 新聞紙面の構成や配列を規定しているコードを相対化することは、全国紙同士を比較することだけでは困難である。
- e メディアのコンテキストが虚構であるとして、社会的実践になんら役立たないと結論付けてしまうことは誤りである。

注 意 事 項 続 き

- 4 試験終了後には、問題冊子の上に解答用紙を裏返して置きなさい。解答用紙の回収後は監督者の指示に従うこと。

- 5 問題冊子は持ち帰ること。